

死望む声は「生きたいけど生きられないほどつらい」というメッセージ

自殺の悩み 僧侶が返信

首都圏の僧侶たちが「自殺対策に取り組む僧侶の会」を結成、今月から自殺に関する悩み相談を手紙で受け、手書きで返信している。「お坊さんとの往復書簡」との試みで、同会は「手紙を書くことで混乱した気持ちを整理してもらおうことができる」と自殺予防効果を期待している。

【伊藤直孝】

代表を務める藤澤克己さん(46)は、IT企業のエンジニアを経て06年に父親が住職を務める東京都港区の浄土真宗本願寺派安楽寺の副住職になった。会社員の時から、市民団体による自殺問題の電話相談員を務めてきた。その中で、「死を望む声は『本当は生きたい。でも生きられないほどつらい』というメッセージの裏返しだ」と感じてきた。

15人、宗派超え

昨年5月、同じ思いを持つ知人の僧侶に声をかけ会を結成。現在は、浄土真宗、日蓮宗など宗派を超えた都内

首都圏有志 「手紙で気持ち整理して」

や千葉、神奈川県などの15人が、自殺者の追悼法要を開くなどしている。今月7日にホームページを開設、手紙相談を呼びかけている。送られた手紙は、1人が代表して返事を書く。

藤澤さんは「メールや電話は思いをすぐ伝えるが、手紙は立ち止まって気持ちを整理できる。ゆったりした時間が流れる寺で過ごす僧侶だからこそ、手紙という方法で自殺に悩む人と向き合える」と話している。

手紙のあて先は〒108-0073東京都港区三田4の8の20「往復書簡事務局」。



僧侶による手紙での自殺対策に取り組む藤澤克己さん